神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Historia de los estudios contrastivos de la modalidad en español y japonés -2-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶌, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1840

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

日西モダリティ対照研究史（2）[1]

福　嶌　教　隆

4.　モダリティの対照 ① 狭義のアプローチ [2]

「モダリティの対照」という課題を設けた場合，一般的な手法は，モダリティと関連の深い形式を両言語から選び出し，その共通点と相違点を検討するという，直接的なものであろう。この狭い意味でのモダリティ対照研究を，いま仮に「狭義のアプローチ」と呼ぶことにし，まずこの分野を検討しよう。

4.1.　本田（1985）

この種の研究の例として，本田（1985）をあげることができる。本田は，スペイン語では，動詞の叙法の使い分けによって，対象についての話者のとらえ方の微妙な違いを表現できると言う。

（13）a. Los japoneses no creen que {existe / exista} un sistema social más deseable.
　　b. 日本人はもっと望ましい社会体制があるということを信じない。

たとえば，（13a）では従属節の「存在する」という動詞を直説法，接続法のいずれの形にすることも可能である。直説法を用いた場合は，話者は「もっと望ましい社会体制」を具体的に想定していることを表し，接続法を選んだ場合は，それを単なる一般的可能性として述べていることになる。

一方，対応する日本語文（13b）は状況依存的で，このような「話者の主観を表す客観的形式が存在せず，故にそれは文脈の中で推測する以外に捉え様がない」（p.701）という。[3] これは，あるモダリティ的な区別が，スペイン語では叙法という形式で明示的に表せるが，日本語ではそうではないという主張である。

4.2.　上田（2002）

上田（2002）の研究も狭義のアプローチの例とみなすことができる。上田は（14）～（16）のような対をあげ，日本語で「とは」という形式が用いられるこ

1　本稿は，拙稿（2012）の続編である。拙稿（2012）及び本稿の内容は，スペイン語に改めて拙著（近刊）に再録されている。

2　この節及び次の第 5 節は，拙稿（2002a），同（2003）の一部を発展させたものである。

3　ただし，日本語でも，「日本人は，もっと望ましい社会体制があるのに，それを信じない」（具体的実在），「日本人は，もっと望ましい社会体制がある（など）とは信じない」（一般的可能性）などの表現方法をとれば，問題の区別の明示は可能だと思われる。

との「理由として，主節による『評価』という特徴が考えられる」（p.22）と主張する。

（14）a. Creo que viene.
　　b. 私は彼が来ると思う。
（15）a. No creo que venga.
　　b. 私は彼が来るとは思わない。
（16）a. ¡Qué bueno que me llamaras!
　　b. 君が電話をかけてくれたとはありがたい。

このように，日本語での「とは」の使用はスペイン語で従属動詞の語形が接続法である場合と対応することが多い。また，この接続法は，従属節の内容について「思わない」，「ありがたい」といった主観的な評価を与える用法に属する。ここから上田は，「とは」と評価を表す接続法との間に共通の特徴を認めるのである。この提言は，スペイン語の視点を利用して，日本語の助詞の機能分析を行ったものである。

4.3.　野田（2000）

以上の研究とは反対に，日本語のモダリティ形式を発想の基軸として，それに対応する形式がスペイン語に存在するかどうかを調べる研究方法もある。その例が野田（2000）である。

野田は，語だけでなく接辞や補助動詞を含む述語全体を対象とする「拡大活用論」を提唱し，日本語とスペイン語を比べている。そこでは「参与者，ボイス，アスペクト，肯定否定，テンス，ていねいさ」といった文法カテゴリーと並んで，「ムード」が扱われている。それは次のように整理できる（p.28）。

（17）

ムード	日本語の例	スペイン語の例
関係づけ	のだ，わけだ	es que
不確かさ	ようだ，らしい	parece que
意志	（よ）う	ir a + 不定詞
伝聞	［する］そうだ	se dice que
命令・依頼	てください	命令法
確認	ね	

この表にあがっている「ムード」の下位項目や日本語の諸形態は，日本語学ではしばしば共通性の高い要素とし見なされる[4]が，対応するスペイン語の諸

4　たとえば益岡（1991）は，「説明」，「価値判断」，「真偽判断」，「表現類型」，「ていねいさ」，「伝達態度」のモダリティを表す形式として，順に「のだ，わけだ」，「べきだ」，「ようだ，↗

形態は，形式的な違いが顕著なため，このようなまとめ方をされることは稀である。[5] 日本語に視点を置くことによって初めて，一見すると関係の乏しそうなスペイン語の諸形態を対置してみるという試みが生まれたのである。

このように，ある種のモダリティを表す形式が高度に文法化した言語については，その研究が進むが，そうでない言語については，そのモダリティの存在が見落とされがちになる。日本語に関しては，「ある事柄を概念の事実性を保証しようとする表現態度」と「ある事柄を概念のレベルに留めて伝えようとする表現態度」の区別が，どのような言語形式で行われているか，また，それらの形式にはどのような特徴があるかという探究を，もっと深めることが可能であろう。逆にスペイン語では，動詞の叙法ばかりでなく，es que, parece que, se dice que のような要素のモダリティにも関心をむけることが必要だと考えられる。

4.4. 和佐（2001）

2 つの言語を対照し，双方の分析に貢献することも不可能ではない。和佐（2001）はそれに成功した数少ない例の 1 つである。同研究によれば，日西両言語において可能性判断を表す副詞は，全体疑問文に現れ得ないものと，それが可能であるものとに大別されるという。

（18）a. ¿Es usted {*seguramente / *probablemente} español?
　　b. あなたは｛* きっと／ * たぶん｝スペイン人ですか？

（19）a. *Seguramente viene, seguramente no viene.
　　b. * きっと来るかもしれないし，きっと来ないかもしれない。

（20）a. ¿{Quizá / Tal vez / Acaso / A lo mejor} Andrés ha terminado la carrera?
　　b. もしかすると，あれは田中君かな？

（21）a. A lo mejor viene, a lo mejor no viene.
　　b. もしかすると来るかもしれないし，もしかすると来ないかもしれない。

全体疑問文に現れ得ない副詞には，スペイン語では，seguramente, probablemente など，日本語では「きっと」，「たぶん」などがある。一方，それが許されるものは，スペイン語では quizá, tal vez, acaso, a lo mejor が含まれ，日本語では「もしかすると」などが含まれる。前者は（19）のような複数命題を並置した平叙文にも現れないが，後者は（20）に見られるように，それが可能だという。

↘らしい」，「てください」，「です，ます」，「ね」のような例をあげている。

5　なお，表（17）のスペイン語の「確認」の欄が空欄となっているのは，スペイン語では述語成分でこの概念を表せないことによる。¿no? のような付加疑問形式は無論存在する。

和佐は，この差異は後者の副詞群が表す不確定性に起因すると説く。即ち，これらは「肯定（＋）か否定（－）かの判断が不確定である（±）であること」という本質的意味を有するので，全体疑問文や複数命題を並置した平叙文に使用が可能である。一方，前者の副詞群は「確信はないが高い蓋然性を示す」といった，肯定または否定の一方の命題に対しての真偽判断しかできないため，上述の構文には現れ得ない，というのである。

この提言は，「不確定性」という概念が日西両言語の分析に有効であることを示したものだと言える。[6]

5.　モダリティの対照 ② 広義のアプローチ

以上のような言語現象そのものを比べる対照研究とは別に，ある言語の分析から得られた成果を，他の言語の分析に援用するというアプローチが存在する。これを「広義のアプローチ」と呼ぶことにしよう。[7]

5.1.　拙稿（1990）

拙稿（1990）は，国語学・日本語学で発展した「陳述」，「モダリティ」の概念をスペイン語の叙法に適用する可能性を探った論考の嚆矢と言えるものである。「スペイン語の直説法は，陳述，あるいは発話行為のモダリティの高い節に用いられ，接続法は陳述の度合が低い節，換言すれば命題性の高い節に用いられる」という仮説を提出した。

（22）a. ［(creo) $_{\text{陳述性大}}$ que viene María］.
　　b. ［$_{\text{陳述}}$ deseo ［$_{\text{命題性大}}$ que venga María］］.
　　c. ［$_{\text{陳述}}$ me alegro de ［$_{\text{命題性大}}$ que venga María］］.

たとえば（22a）の話者は，従属節の内容が真であることを文の主たる情報として主張しており，従属動詞には直説法が用いられている。主動詞 creo は通例の音調の発話では強勢をかけずに発音され，統語的には主節であっても，情報の面では挿入節的な地位にある。一方，（22b）では「マリアが来ること」は話者が思い描いた願望に過ぎず，それを事実だと主張することはできない。ここでは deseo が統語的にも意味的にも主動詞として機能しており，従属動詞は接続法になる。（22c）の話者の発話意図は，主節に示された喜びの表明であ

6　なお，和佐は，この問題をスペイン語の副詞に限定して論じた和佐（2001b）も発表している。

7　この問題について益岡（1990: 72）は，次のように述べている。「『対照研究』の名の下では従来あまり取り上げられることのなかった，もう 1 つの対照研究があることを忘れてはならない。言語研究の方法の 1 つとしての対照研究がそれである。これは，言わば，個別言語の研究と言語の普遍的，類型論的研究を橋渡しする役割を担うものである」。

る。従属節が示す「マリアが来ること」は事実ではあっても，主節の内容を支える副次的情報を担っており，命題の領域に近いと考えられ，従って接続法となる。

ここでは，「命題」とは，情報を形作る諸要素と，その関係の表明を指し，「陳述」は，文が完全な情報を伝達するために，命題を包んで表された話者の判断を意味する。

拙稿（1990）では，この仮説の妥当性を示すために，主節の上に主節が重なった，2 重の主節構造における叙法対立が無理なく説明できることを論じている。

5.2. 拙稿（2000b），（2001），（2002a）

拙稿（2000b）は，第 2 節で紹介した南（1974）の階層構造モデルを採り入れて仮説を発展させた研究である。即ち，スペイン語の従属節にも日本語と同様に，文らしさの高いものと，低いものがあることを認め，直説法は前者に用いられ，接続法は後者に用いられるというのである。

その根拠として，次のような事例があげられる。

（23）a. Creo que van a bailar la contradanza {ϕ . /, ¿no?}
b. Dicen que van a bailar la contradanza {ϕ . /, ¿no?}
c. Me doy cuenta de que van a bailar la contradanza {ϕ . / ?, ¿no?}
d. Me interesa mucho que vayan a bailar la contradanza {ϕ . / ?, ¿no?}
e. Dudo que vayan a bailar la contradanza {ϕ . / ?, ¿no?}
f. Quiero que vayan a bailar la contradanza {ϕ . / ?, *¿no?}

第 1 に，（23）の各文は，文末に付加疑問の ¿no? をつけると，文法性に差が生じる。従属動詞が直説法の文の文法性が高く，接続法の文では低くなる。これは，この句の付加が可能な文の従属節は，統語的には従属節であっても，情報の上では文の主たる役割を担っているからだと考えられる。

（24）a. {Creo / Se dice / Me doy cuenta de} que el nuevo gerente es muy exigente.
b. {Lamento / Dudo / Quiero} que el nuevo gerente sea muy exigente.
c. El nuevo gerente, {creo / se dice / me doy cuenta}, es muy exigente.
d. El nuevo gerente, {?lamento / *dudo / *quiero}, {es / sea} muy exigente.

第 2 に，（24a, b）の各文の主動詞を挿入句化して（24c, d）のような文を作ると，文法性に差が生じる。従属動詞が直説法の文の文法性が高く，接続法の文では，新たな主動詞を es にしようと，sea にしようと，文として成立しなくなる。この操作が許されない文の従属節は，文らしさが低く，統語的にも情報的にも従属性の高い位置にあるからだと考えれば，この現象は説明できる。

また，2 重の主節構造の叙法選択の規則や，el hecho de que, de ahí que, aunque で始まる節が事実を表すのに接続法が用いられる理由も，上記の仮説で説明できることに紙幅が割かれている。

拙稿（2001）は，以上の議論をスペイン語圏読者を対象に，整理して述べたものである。また拙稿（2002a）は，その時点までの日西モダリティ研究を概観した上で，拙稿（2000b）の内容を，和佐（1999）と対比しつつ紹介した。その結果，「拙稿（2000b）は，接続法を命題と関連づけてとらえようとするのに対し，（…）和佐（1999）は，接続法が一定のモダリティをになう形式と見る点で，立場が異なっている。スペイン語の法について，このような視点の違いがありうることが鮮明になったのは，日本語という光源を用いて問題を照射した成果の 1 つであるといえよう」（p.75）という指摘に至っている。

5.3.　和佐（1999）

いま述べたように，和佐（1999）は接続法を「モダリティを表す文法的手段の 1 つ」（p.121）と見なし，接続法は命題に対する「真偽判断を差し控えるモダリティ（modalidad de reserva epistémica）を常に表す」（p.126）と説き，次のような文構成を示す。

（25）a. [真偽判断のモダリティ Es seguro [真偽判断のモダリティ que viene]].
　　b. [真偽判断のモダリティ Es probable [真偽判断を差し控えるモダリティ que venga]].
　　c. [評価のモダリティ Es inútil [真偽判断を差し控えるモダリティ que venga]].

和佐によれば，（25a）の従属節では断定の真偽判断のモダリティが表されるため，直説法が選ばれる。一方，（25b）では真偽判断は非断定であり，命題の真実性に対する不確かさから，従属節の事態に対する真偽判断を差し控えるため，接続法が使用される。また（25c）では，従属節の命題を前提として，主節で評価のモダリティ（modalidad evaluativa）が表されるため，従属節の命題に対する真偽判断が差し控えられ，接続法が使用されるという。

この和佐の接続法論は，アメリカの権威ある学会誌 *Hispania* に発表されたもので，日本語学の研究成果を採り入れた精密なモダリティ分類に立脚しており，この分野に大きな貢献を行った。[8]

なお，和佐（1999: 121）は拙稿（1990）について，「接続法はモダリティを表す文法手段の 1 つであるから，接続法をとる節は命題性を表すものではない」との批判を行なっている。これについては拙稿（2000: 207-208）で既に反論を試みたが，いま少し補足してみたい。拙稿（1990）でいう modalidad とは，陳述，あるいは発話行為のモダリティを指しており，発話内容のモダリティに

8　なお，この刊行物には，高垣（1984），和佐（2002）の接続法論も掲載された。

は言及していない。また，接続法は「陳述の度合いが低い」あるいは「命題性の高い」節で用いられると述べるにとどまっており，「接続法が命題内部に完全に属する」とは主張していない。拙稿（1999）は，日本語学で提唱される何層ものモダリティよりも，むしろ国語学の陳述の概念に想を得ている[9]ため，発話行為のモダリティと発話内容のモダリティの区別についても言及がなく，それが誤解の一因になったかと思われる。

拙稿（1998: 36, 2004: 129, 2007: 57）などで繰り返し述べたように，筆者は，スペイン語の接続法は，内容に関する話者の判断の中止を表すのが，その本質的機能ではないかと考え，Togeby（1953: 16）の説く“suspension d’affirmation”という術語に共鳴してきた。従って，和佐と筆者の想定する接続法の機能は，非常に近似していると言えるのではないだろうか。相違するのは，その機能を和佐は発話内容のモダリティの 1 種という明確な位置付けを与えるのに対し，拙稿はその問題には立ち入らず，命題により近い性格と結び付けて論じるに留まっている点なのである。

5.4.　和佐（2005a）

和佐は 2005 年に，それまで行ってきた日西モダリティ対照研究を，7 つの章からなる書籍にまとめて公刊した。その主張は和佐（1999）の主張を継承発展させたもので，「スペイン語の接続法と，現代日本語の『(よ)う』，『だろう』は，共通して『命題に対する真偽判断を差し控えるモダリティを表す』という本質的意味を持つ」のように要約できる。

和佐は「序章」に続く第 1 章で，まず「叙法」と「モダリティ」の違いを明確にする。第 2 章では，モダリティを「発話・伝達のモダリティ」と「命題めあてのモダリティ」に大別し，前者をさらに（26a）のように下位区分する。第 3 章で Realis / Irrealis の概念と叙法の関係を論じ，その議論を踏まえて，第 4 章で「命題めあてのモダリティ」を（26b）のように下位区分する。

（26）a. 発話・伝達のモダリティ：1）伝達機能のモダリティ（述べ立て，疑問，働き掛け，表出，感嘆）。2）丁寧さのモダリティ
　　b. 命題めあてのモダリティ：真偽判断，感情・評価，当為判断，メタ認識

この章では，仮説の裏付けとして，a lo mejor 及び es que を用いた文の分析に紙幅が割かれている。第 5 章では，日本語の助動詞の分析にも，仮説が有効であることが示される。終章では，主張を再確認し，認知的観点からの研究の

9 「陳述」と「背景素材」の概念をスペイン語学に援用することの可能性には，拙稿（1978: 36）のような，古い段階で既に触れている。

発展，今後の課題などへの示唆をして，本書は結ばれる。

和佐によれば，スペイン語の接続法は，真偽判断文では，命題の真実性に対する不確かさによって導入される。感情・評価を表す文では，従属節の命題を背景化するため，使用される。当為判断文では，従属節の命題は話し手の思い描く未実現の事態であり，真偽判断を行うのが不可能であるため，接続法を用いて，真偽判断を差し控える。no es que... のような否定のメタ認識文では，聞き手の前提を否定し，命題に対する真偽判断を差し控えるため，接続法が用いれらるという。[10]

第 5 章では，日本語の現代語だけでなく，古典語にも分析が及び，次のような文と訳文では，「未然形＋『む』」がスペイン語接続法が対応するところから，「む」は，命題に対する真偽判断を差し控えるモダリティを表す形式ではないかとの提言に至っている。

（27）a.「さやうに聞こし召すばかりにはあらずやはべらむ」
（『源氏物語』，末摘花）
b. —Acaso no valga la pena escucharla.　（和佐 2005a: 172）

（28）a.「月の出でたらむ夜は，見おこせ給えへ」　（『竹取物語』）
b. —Las noches en que haya luna, miradla.　（和佐 2005a: 175）

このように，和佐の研究は本書において，あるモダリティの存在を認めることが，スペイン語だけでなく，日本語の分析にも有益であるという，一段階進んだ主張に至った。

5.6.　和佐（2009a），（近刊）

和佐はその後も精力的に優れた研究を発表し続けている。この項の標題にある 2 本の論考は，スペイン語の接続法の非プロトタイプ的用法として，「驚嘆性（mirativity）」を表す意味機能を持つことを中心に論じたものである。驚嘆性とは，「話し手にとって新しく，思いがけない情報であることを言語形式で示すこと」（和佐，近刊 : 原稿 12）であり，次のような文に認められるという。

（29）a. ¡Es sorprendente que todavía estés viva!
b. ¡Que tenga yo que aguantar este insluto...!
c. 君がここにいるなんて知らなかった。　（和佐 2009a: 4, 6, 8）

驚嘆性は，（29a）では感情を表す接続法で，（29b）では感嘆の意味合いを有する接続法で表されている。また，日本語では（29c）のように，「なんて」がこの意味を表すことがある。和佐は，この問題を，自説の妥当性を高めるため

10　和佐は，その後，この主張を語学教育に応用することの可能性について論じている（和佐 2007，和佐 2009b）。

に用いてるが，モダリティの類型論に新たな方向性を与えた点でも興味深い指摘である。[11]

5.6. 寺﨑（2011）

本節の最後に寺﨑（2011）を取り上げる。この論文はスペイン語の認識モダリティ副詞と叙法，時制の関係を扱ったものであり，厳密には日西対照研究に属するとは言えないが，和佐（2005a）についての言及があることから，触れておくべきだと考える。

寺﨑はモダリティをまず（30a）と（30b）に二分し，それを下位区分する。

（30）a. 発話態度のモダリティ（平叙，疑問，命令，感嘆など）
　　b. 命題内容のモダリティ（認識，評価）

これらのモダリティのうち，認識モダリティには 3 つの叙法が関わる。即ち，直説法は断定，推測法[12] は推測，接続法は断定保留のモダリティを表すというのである（p.210）。このとらえ方は，和佐の主張と非常に類似しているように見えるが，寺﨑によれば，次の点で異なっているという。「和佐（2005a: 90）によると，『接続法は常に命題に対する真偽判断を差し控えるモダリティ（modalidad de reserva epistémica）を表す』という。つまり，接続法は認識モダリティそのものを差し控える形式であると主張する。これに対して，本論は断定を差し控えながら事態を提示する認識モダリティの 1 種であるという趣旨である」（p.219, 注 4）。

両者の見解の差は，この説明に従えば，和佐が「接続法は判断を差し控え，かつ情報ももたらさない」と見なすのに対して，寺﨑は「内容を伝達するが，断定は保留している」ということになる。どちらの見解が適切か，ただちに決め難いが，少なくとも，和佐の説く「真偽判断を差し控えるモダリティ」は「真偽判断モダリティ」の 1 種であるから，和佐は接続法を認識モダリティそのものから分離しようとしているのではないと考えられる。

6. むすび

本稿では，日本語とスペイン語のモダリティの対照研究が，狭義のアプローチにおいても，広義のアプローチにおいても，提案と論争を重ねて着実な進展をしてきたことを確認できた。

11　たとえば Larm（2013）はスウェーデン語のコピュラを用いた感嘆文に過去時制が用いられる現象を驚嘆性と関連付けて論じている。

12　寺﨑は，いわゆる直説法未来形，未来完了形，過去未来形，過去未来完了形をもって，「推測法」という独立した叙法を立てる。

日本語に関しては，「ある事柄を概念のレベルに留めて伝えようとする表現態度」がどう示されるのかという問題提起（本田 1985）や，古典語の「む」，現代語の「(よ)う」，「だろう」が「命題に対する真偽判断を差し控えるモダリティ」を表すという主張（和佐 2005a）などが行われた。

スペイン語については，日本語の陳述やモダリティの概念に関する議論の蓄積が，叙法の規定に新たな視点を与えた。「接続法は命題の領域に近い位置にあり，判断の中止を表す」（拙稿 1990 他），「接続法は真偽判断を差し控えるモダリティを表す」（和佐 2005a 他），「接続法は断定保留のモダリティを表す」（寺﨑 2011）などの主張は，日西対照研究の成果として得られたものである。

一般に，接続法のとらえ方は，次のように図式化できる。

(31) a. モダリティ ////////////////////　命題

直説法
接続法　　不定詞

b. モダリティ >>>>>>>>>>　命題

直説法	接続法	不定詞
判断	判断中止	判断なし

c.［発話態度のモダリティ［発話内容のモダリティ［命題］］］

直説法　　接続法　　不定詞

(31a) は，動詞の形態を定形動詞か非定形動詞かで大別する伝統的なとらえ方の一部である。定形には直説法，接続法が属し，非定形には不定詞が現在分詞，過去分詞とともに属する。このとらえ方では，接続法は，時制，人称，数を保有する点で，直説法と同等であり，かつ不定詞とは一線を画した存在と見なされる。(31b) は，接続法を直説法と不定詞の中間的な存在と見なし，この 3 つの形態を一列に配する立場である。拙稿（1990）他は，この見解の有効性を確かめようとする試みであった。(31c) では，3 つの形態を同一軸でとらえる観点が継承されるが，モダリティを下位区分することによって，それぞれの形態の属する階層が明確になった。和佐（1999）他や寺﨑（2011）の主張は，この立場に分類されるであろう。[13]

日本語と対照することによって，あるいは日本語の研究方法を援用することによって，スペイン語のモダリティの捉え方にこのような観点の違いがあることが浮き彫りにされた。これらの知見は，今後の分析の基礎となるであろう。

13　なお，フランス語学には，これらとは異なる発想が見られる。たとえば井元（2012: 74-75）は，「動詞の概念のみを表現するのが不定法，『概念＋人称』を表現するのが接続法，『概念＋人称＋時間』を表現するのが直説法」というとらえ方を紹介している。この見地では，直説法と接続法の差は「時間」の意識の有無に還元できるということになる。

最後に，本稿で扱った仮説は，全て一元論，即ち，接続法のさまざまな用法を単一の原理に収束してとらえようとする見解に立っていることを指摘しておかねばならない。一元論には，ともすると諸現象を過度に単純化して理解しかねないという危険が伴う。それを避けるためにも，多元論，即ち，複数個の原理で接続法の働きを説明しようとする主張が，日西モダリティ対照研究においても生まれて，議論を戦わせつつ，より優れた発想と分析が導かれることを期待したい。

参考文献（前稿に掲げたものも含む）

Almaraz Romo, Enrique・濱松法子・安富雄平（2010）「日本語の接頭辞「お」とスペイン語の縮小辞との形態および機能に関する対照研究」,『拓殖大学語学研究』123，pp.27-58，東京：拓殖大学。

Bosque, Ignacio（2012）“Mood: indicative vs. subjunctive”, *The Handbook of Hispanic Linguistics*（José Ignacio Hualde, Antxon Olarrea & Erin O’Rourke, eds.）, pp.373-394, Oxford: Blackwell.

_____ y Violeta Demonte（eds.）（1999）*Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid: Espasa.

出口厚美（1982）「スペイン語における叙法と法性」,『大阪外国語大学学報』56, pp.1-16, 箕面：大阪外国語大学。

_____（1989）「国内の雑誌等に発表されたスペイン語に関する文献（1952-1988）［その 2］」,『大阪外国語大学論集』2，pp.53-82，箕面：大阪外国語大学（pp.66-67「対照（日本語）」）。

芳賀綏（1954）『“陳述”とは何もの ?』。『國語國文』23，pp.241-255，京都：京都大学。

長谷川信弥・山田敏弘（2011）『日本語から考えるスペイン語の表現』，東京：白水社。

本田誠二（1985）「日本語とスペイン語の叙法性に関する一考察」,『熊本商大論集』31，pp.687-708，熊本：熊本商科大学。

Igualada Belchi, Dolores Anunciación（1990）“Modalidad y acto de habla. A propósito de los enunciados causales en español”, *Verba* 17, pp.231-240, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

井元秀剛（2011）「論評：東郷雄二『中級フランス語　あらわす文法』，曽我祐典『中級フランス語　つたえる文法』，西村牧夫『中級フランス語　よみとく文法』白水社，2011」,『フランス語学研究』44，pp.69-75，東京：日本フランス語学会。

Jiménez Juliá, Tomás（1989）“Modalidad, modo verbal y *modus clausal* en español”, *Verba* 16, pp.175-214, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

Johnson, Yuki（2003）*Modality and the Japanese Language*, Ann Arbor: The University of Michigan.

川口正通（2009）「譲歩解釈を受ける現在分詞構文の用法について ―日本語との対照から―」，*Estudios Hispánicos* 34，pp.81-96，箕面：大阪大学。

国立国語研究所・編（1994）『日本語とスペイン語(1)』，東京：くろしお出版（pp.171-175「日西対照音声学」，pp.189-190「形態・語彙の日西対照」，pp.194-205「日西文法の対照」，pp.216-222「日本人に対するスペイン語教育・スペイン語話者に対する日本語教育」）。

_____（1997）『日本語とスペイン語(2)』，東京：くろしお出版。

_____（2000）『日本語とスペイン語(3)』，東京：くろしお出版。

黒滝真理子（2005）『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性．モダリティの日英語対照研究』，東京：くろしお出版。

Larm, Lars（2013）“Mirativity, exclamativity and theticity: the emotive past tense in Swedish”,『平成 25 年度科学研究費による国際モダリティワークショップ発表論文集』4（澤田治美・編），pp.1-9，枚方：関西外国語大学。

益岡隆志（1990）「モダリティ」,『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説（下）』（宮地裕・他・編），pp.71-96，東京：明治書院。

_____（1991）『モダリティの文法』，東京：くろしお出版。

_____（2007）『日本語モダリティ探究』，東京：くろしお出版。

_____（2009）“Modality from a Japanese perspective”, *Japanese Modality. Exploring its Scope and Interpretation*（Barbara Pizziconi & Mika Kizu, eds.），pp.36-55, Houndmills: Palgrave Macmillan.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』，東京：大修館書店。

三好準之助（2009）「多義語「目」と‘ojo’の日西対照研究」，*Hispánica* 53, pp. 41-60, 東京：日本イスパニヤ学会。

_____（2012）*La atenuación del japonés. Un ensayo pragmalingüístico*, Saarbrücken: Editorial Académica Española.

Narrog, Heiko（2010a）*Modality in Japanese*, Amsterdam: John Benjamins.

_____（2010b）「『日本文法論』における文成立関連の概念とヨーロッパの言語学 ―陳述，統覚作用，モダリティ，ムード」,『山田文法の現代的意義』（斉藤倫明・大木一夫・編），pp.217-239，東京：ひつじ書房。

野田尚史（2000）「日本語とスペイン語の拡大活用論」,『日本語とスペイン語

（3）』（国立国語研究所・編），pp.11-37，東京：くろしお出版。
尾上圭介（1996）「文をどう見たか」，『日本語学』15: 9（8 月号），pp.1-12，東京：明治書院。
Otaola Olano, Concepción（1988）“La modalidad（con especial referencia a la lengua española）”, *Revista de Filología Española* 48: 1/2, pp.97-117, Madrid: Consejo Seperior de Investigaciones Científicas.
Palmer, Frank Robert（1986 1st. ed., 2001 2nd. ed.）*Mood and Modality*, Cambridge: Cambrige University.
Real Academia Española（1973）*Esbozo de una nueva gramática de la lengua española,* Madrid: Espasa-Calpe.
_____ y Asociacióín de Academias de la Lengua Española（2009）*Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa.
澤田治美（2006）『モダリティ』，東京：開拓社。
高垣敏博（1984）“Subjunctive as the marker of subordination”, *Hispania* 57, pp. 248-256, Baltimore: The American Association of Teachers of Spanish and Portuguese.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』，東京：くろしお出版。
寺﨑英樹（2011）「スペイン語の認識モダリティ副詞と法・時制の相関」，『発話と文のモダリティ ―対照研究の視点から』（武内道子・佐藤裕美・編），pp.207-224, 東京：ひつじ書房。
Togeby, Knud（1953）*Mode, aspect et temps en espagnol,* Copenhagen: Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab.
時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』，東京：岩波書店。
上田博人（2002）「日本語の「は」とスペイン語の接続法」，『日本語学』21: 8（7 月号），pp.13-24，明治書院。
和佐敦子（1999）“El subjuntivo y la modalidad”, *Hispania* 82: 1, pp,121-127, Baltimore: The American Association of Teachers of Spanish and Portuguese.
_____（2001a）「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞 ―疑問文との共起をめぐって―」，『言語研究』120，pp.67-88，日本言語学会。
_____（2001b）“Los adverbios epistémicos que co-aparecen con oraciones interrogativas”, *Hispánica* 45, pp.37-47，東京：日本イスパニヤ学会。
_____（2002）“*A lo mejor* y el subjuntivo”, *Hispania* 85, pp.131-136, Baltimore: The American Association of Teachers of Spanish and Portuguese.
_____（2005a）『スペイン語と日本語のモダリティ』，東京：くろしお出版。

_____（2005b）「日本語とスペイン語の対照研究の動向」,『日本語と諸言語の対照研究』（外国学研究 61）（益岡隆志・編）, pp.137-145, 神戸：神戸市外国語大学。

_____（2006）「スペイン語と日本語の条件表現 ―叙法と時制の観点から―」,『条件表現の対照』（益岡隆志・編）, pp.151-171, 東京：くろしお出版。

_____（2007）「認知言語学的観点からの接続法習得」, *Hispánica* 51, pp.21-37, 東京：日本イスパニヤ学会。

_____（2009a）“Miratividad en español y en japonés”, *The Journal of Intercultural Studies* 36, pp.1-10, 枚方：関西外国語大学。

_____（2009b）“Estrategias de enseñanza del modo subjuntivo para hablantes de japonés”, *Cuadernos CANELA* 21, pp.119-128, 京都：日本・スペイン・ラテンアメリカ学会。

_____（近刊）「スペイン語におけるムードとモダリティ」,『ひつじ意味論講座 3. モダリティⅠ：理論と方法』（澤田治美・編）, 東京：ひつじ書房。

渡辺実（1953）「叙述と陳述 ―述語文節の構造―」,『國語學』13・14, pp.20-34, 東京：国語学会。

_____（1971）『国語構文論』, 東京：塙書房。

Whaley, Lindsay L.（1997）*Introduction to Typology*, Thousand Oaks: Sage Publications.（2006）大堀壽夫・古賀裕章・山泉実・訳『言語類型論入門』, 東京：岩波書店。

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』, 東京：寶文館。

山村ひろみ（2005）「職業名詞に見る「男」と「女」の表され方 ―日本語とスペイン語の対比から」,『言語と文化のジェンダー』（谷口秀子・他・編）, 福岡：九州大学。

_____・高垣敏博（2010）「スペイン語の時制 ―日本語との対照」,『語学研究所論集』15, pp.161-180, 東京：東京外国語大学。

湯本久美子（2004）『日英語認知モダリティ論 ―連続性の視座』, 東京：くろしお出版。

拙稿（1978）「イスパニア語接続法の感情動詞に導かれる用法について」,『外国語教育』5, pp.25-37, 天理：天理大学。

_____（1990）“Sobre la cláusula superregente”, *Indicativo y subjuntivo*（Ignacio Bosque, ed.）, pp.164-179, 435-436, Madrid: Taurus.

_____（1991）「イスパニア語モダリティ研究の最近の動向について」,『神戸外大論叢』42: 1, pp.1-13, 神戸：神戸市外国語大学。

_____（1997）「日西対照研究文献リスト（補遺及び 1994 ～ 1997 年）」,『日本語とスペイン語(2)』（国立国語研究所・編）, pp.297-300, 東京：くろしお出版。
_____（1998）（2004）「aunque 節中の叙法について(1)」,「同(2)」,『神戸外大論叢』49: 2, pp.29-43, 55: 6, pp.111-131, 神戸：神戸市外国語大学。
_____（2000a）「日西対照研究文献リスト」,『日本語とスペイン語(3)』（国立国語研究所・編）, pp.313-326, 東京 : くろしお出版。
_____（2000b）「日西モダリティ対照研究序説」,『日本語とスペイン語(3)』（国立国語研究所・編）, pp.187-210, 東京：くろしお出版。
_____（2001）“En busca del valor del modo subjuntivo（desde el punto de vista de la lingüística japonesa）”, *Hispanica Polonorum* 3, pp.102-113, Lodz（Poland）.
_____（2002a）「スペイン語と日本語のモダリティの対照について」,『日本語学』21: 2（2 月号）, pp.68-76, 東京：明治書院。
_____（2002b）「書評 : Frank Robert PALMER, *MOOD AND MODALITY*, 2nd. ed., Cambridge University Press, 2001」, *Hispánica* 46, pp.130-134, 東京：日本イスパニヤ学会。
_____（2003）「スペイン語と日本語の主題の対照研究の動向」, *Clavel* 1, pp.48-58, 神戸：対照研究セミナー。
_____（2004）「スペイン語の主題に関する記述的研究」,『主題の対照』（益岡隆志・編）, pp.129-148, 東京：くろしお出版。
_____（2007）「イスパニア語の感情を表す語句に導かれる接続法について」,『神戸外大論叢』58: 3, pp.53-72, 神戸：神戸市外国語大学。
_____（2011a）“Las expresiones de rol en español —un estudio contrastivo con el japonés—”, *Cuadernos CANELA* 23, pp.9-26, 京都：日本・スペイン・ラテンアメリカ学会。
_____（2011b）「スペイン語の主題に関する一考察 —日本語との対照を通じて—」,『ロマンス語研究』44, pp.11-20, 東京：日本ロマンス語学会。
_____（2011c）「スペイン王立学士院の叙法の取り扱いについて」,『神戸外大論叢』62: 4, pp.7-20, 神戸：神戸市外国語大学。
_____（2012）「日西モダリティ対照研究史(1)」,『神戸外大論叢』63: 3, pp.3-11, 神戸：神戸市外国語大学。
_____（近刊）*El español y el japonés*（研究叢書 53）, 神戸：神戸市外国語大学。